

ピレボス篇とアリストテレスの形而上學

第一章第六節(ヘンリ・ジヤックスン)

高 田 三 郎 譯

四、アリストテレスの要約

せる後期イデア編

を示し得るとするならば、思ふに、私はともかくも直觀的に想到され得る一つの場合を明かにしたと主張することだけではできらざらう。

プラトンの後期の敎説を明かにせむとする此の試みに於て、以上私は主としてピレボス篇に頼つて來たのであつて、ポリテイコス篇二四九への言

此の重要な一節(其の一部分はあとに轉載する)に於て主張されてゐる主要點は左の如くである。

及の如きは純然たる説明的・補足的意味のものに過ぎなかつた。いま私は新たに「形而上學」第一章第六節に於ける、プラトンの存在論に關する、

一 プラトンの體系は大體ピタゴラス學徒のそれに一致するが、またプラトンには彼等と共通しない或る敎義が存する。

アリストテレスの要約から出發しようとする。もし(一)この論議紛々たる一節が自家撞著に陥るものでないこと、そして(二)こゝに記された敎説はあらゆる點に於てピレボス篇のそれに外ならぬこと、

二 かゝるプラトンの敎への特異的表徴をなすものほ、(一)ヘラクレイトス學派のクラテュロスから傳へられたところの *αἰσθητὰ* は流轉し従つてそれは知識の對象ではないといふ敎説、ならば

ゆる點に於てピレボス篇のそれに外ならぬこと、

それは知識の對象ではないといふ敎説、ならば

(二) 感性的者とは離れてイデアが存在し感性的者はその存在性をこれからして獲得し來るといふ、ソクラテスの倫理學的一般者の敎説に基くところの説、が即ちこれである。

今度はプラトニズムのうち、ピタゴレアニズムに類似點を有する如き部分を見る。第一に個物とイデアとの關係 (*methésis*) に關するプラトンの理論は、物と數との關係 (*mathesis*) に就てのみである、そしてその不完全なること兩者何れも選ぶところがない。

五 次にプラトンは實在^{エグジステンシス}の三種類、*aiōthra*、

mathēmatiká, eídōn を區別する、さうしてイデアは個物の原因なのであるからイデアの要素はやがて又すべての物の要素であると考へる。——

六 即ち *to mélya kai to mathon* が *einai* であり、*to einai*

が *ousia* なのである、なせならイデアが *to mélya kai to mathon* から出て來るのは、*to einai* への *methésis* によるのだから。で彼の體系の此の部分では、プラトンは *einai* を *ousia* となし *epithēsis* を個物の *aitia* *tis ousias* と見做す點ピタゴラス學徒と一致し、彼が然しながら、*aitēton* を複合體^{デュアルティ}となして之を *to mélya kai to mathon* と呼ぶと、*epithēsis* を物から區別されたものとせず、そして *mathēmatiká* に對して *aiōthra* と *eídōn* との中間に當る位地を與へると、彼はピタゴラス學徒と袂を別つてゐる。

七、プラトニズムをピタゴレアニズムから區別する種々の敎説のうちの一つ——*to einai kai oi epithēsis* の乖離的存在の敎説と、イデアに關する敎説と——はプラトンの論理的研究に職由するものであり、*aitēton* を複合體に分解することは個物の雜多性を質料因に遡らむとする希望

八から工夫されたものである。この最後の工夫はしかしながら失敗である、なせなら手近な例をとつても、雑多性は質料よりも寧しろ形相に起因するものなることがしめされるやうだからである。

九 プラトンの原因論はかくの如くである。彼は然しながら明かに二つの原因、*τί ἐστίν* と質料因と、を認めてゐるに過ぎない、即ちイデアが
 一〇 個物の *αἴτια τῶν τί ἐστί* また *εἶ* がイデアの *αἴτιον τῶν τί ἐστί* であり、イデア及び個物の兩者の質料因が *τὸ μέγα καὶ τὸ μικρόν* なる複合體なのである。

この二要素に於て彼はそれ／＼善と惡との根源を、あたかもエムペドクレスやアナクサゴラスの如く、認めてゐる。

此の一節に於て見出された困難と之を避けむが

ためになされた試みとの詳細な叙述に就ては、讀者はポニーッツの此箇所の註釋及びツェラーの「プラトン研究」希臘人の哲學を参照されむことを希望する。此處では次のことを述べておけば十分であらう。すなはち註釋者や歴史家たちは何れも六―七段に謂ふ *συνθεσις* がイデアと同一のものなることは想定し、聲を合せて尋ねてゐる——イデアと結合して個物を生ずるところの無限定者そのものが、一と結合すれば今度はイデアを生ずる、といふことは如何にして可能であるか？更にまた——イデアの形相因たる一を個物の形相因たるイデアと同一視することによつてアリストテレスは何を意味するのであるか？彼等はなほ、その説明のために、イデアを生ずる一と無限定者は個物を生ずる一（即ちイデア）と無限定者とに同一ではなく單に類似的なのである、と假想することに於ても一致してゐるやうである。彼等は然しア

リストテレスの證言の的確な意義に就ては觀る所を異にしてゐる。すなはち或る人々は彼の言を牽強的に解釋して自己流の説明を彼の叙説のうちへ読み入れてをり、また他の人々は、之等の言葉が何等かの意味を有つものとすれば、まさしく彼が明白にそして確然と、プラトンはイデアの要素とすべての物の要素とを同一視した、となしてゐるものなることを認めた上、この弟子は「この問題に關する限りプラトンの意味するところを十分理解しなかつた」といふ假想にまで導かれてゐるのである。この最後の假想は、但し、アリストテレスが融和し難き矛盾をプラトロンに歸してゐるといふことを見たのみではアリストテレスの過失を説明することにはならない、といふ理由だけによつても、不十分なものなることは明かである。ではこの外に他の説明は存しないであらうか。

私がもし茲に、この正統的プラトニズムの要約

ヒレホス篇とアリストテレスの形而上學

に於て、事物の形相因たる *epithuoi* はイデアではないといふならば、讀者は恐らく驚駭することであらう。なるほど、第三段に於てアリストテレスはピタゴラス學派の體系に於ける個物の *epithuoi* への關係を、プラトンの體系に於ける個物とイデアとの關係に等しいものとして表してをり、また彼が六―七段に於て *to en kai oi epithuoi* を以て、プラトンの構装（アプレタス）の部分と認めてゐることも事實である。然しプラトンのイデアがピタゴラス學派の *epithuoi* に等しいからといつて、プラトンの *epithuoi* がプラトンのイデアに同一だといふことには決してならない。また、第五段の結末の *es e-eurov gar kata methew tou epos ta eion eura tous epithuoi* なる句のうち、*tous epithuoi* を「アレキサンダー・アフロディシエンシス以來多くの註釋者たちが *ta eion* と同一視するべきもの」と想定して來たことは事實であるが、*tous epithuoi* が同

格であるといふポニツツの見解も、*ta eion* が主語 *tois apothous* が通語だとするツェラーの示唆（プラトン研究二三六）も何等確信を齎らさない。で私は、ツェラーが「希臘人の哲學」二卷一冊六二八に於て *ta eion* を削除するとき 彼は正しい方向に第一歩を踏み出したものである、といふ考への下に、假りに茲に *ta eion* は之を留保し *tois apothous* といふ言葉、これの占むべき場所は直ぐその近くに見出すことが出来るのである、を削除することを提議する。なるほどまた、第九段は註釋者や歴史家たちの想定に味方するやうに思はれはするが、アリストテレスは此處では、彼自らも承認する如く、プラトンの教説を録してゐるのでなく之を批判してゐるのであるから、この一致の考察は自餘を吟味し了るまで暫く延期して差支へないと思ふ。

アリストテレスが然しながら *apothous* のイデア

と同一なることを想定してゐたと考へることは甚だ困難であり、第七段にあつては彼は *tois kai tois apothous* をイデアから區別してゐる如く思はれるくらゐである。然るに *tois* は五―六段に於てイデアの *ovtas* 即ち形相的要素たることが明かに公言されてをり、六段の第二文にあつてはまた *oi apothous* が個物の *aitios tis ovtas* 即ち形相的要素たることが齊しく明かに公言されてゐる。さうすれば、アリストテレスがプラトンはイデアの要素がすべてこの物の要素であると考へてゐたといふとき彼は形相的要素としては *tois kai oi apothous* を、即ち *tois* がイデアの形相的要素であり *oi apothous* が個物の形相的要素であると、解してゐたのだとは思はれないであらうか。私には五―六段はそのまゝで甚だよくかゝる意味を傳へてゐるやうに思はれるのである。たゞ、先きに、*tois apothous* なる言葉を五段の終に於ては餘分で

あり非文法的であるゆゑに取除いておいたが、いま私は試みに之を *es to oikian to eu* の後へ、*kai* を前置して置くことにする。と五―七段の思想上のつながりは左の如くなる。――

「プラトンはイデアの要素がやがてまた物の要素であると考へてゐた。即ち質料的要素は *to mélya kai to métron* であり、形相的要素は *to eu kai oi áphthoi* である。更に嚴密にいふならば、イデアは *to eu*、それはプラトンにあつてもピタゴラス學徒に於ける如く一つの *ousia* なのであるが、*hē metabēs* によつて *to mélya kai to métron* より生ずるものであり、個物の形相因は *oi áphthoi* である。――これ亦プラトンとピタゴラス學徒との一致點なのである。プラトンは然しながら、無限定者を複合體 (*to mélya kai to métron*) となし、*áphthoi* を感性的者から分離し、そして *mathēmatiká* に中間的地位を與へてゐることに於てピタゴ

ラス學徒と異なる。此處に *to eu kai oi áphthoi* を感性的者から分離し、イデアを導入してゐるのはプラトンの論理的研究の結果である。」

明かに茲に、これまでのところ前後矛盾しない意味が獲得されたわけであり、そして此處でプラトンに歸せられてゐるところの教説は、あたかもピレボス篇に於て見出されたそれに外ならない。實際(一)ピレボス篇に於ては *to métron kai to nous* がすべてのものゝ形相的要素であつて、*to métron* はイデアの形相的要素・*ta nous* は個物の形相的要素であつた如く、同様に此處では *to eu kai oi áphthoi* がすべてのものゝ形相的要素であり、*to eu* はイデアの・*oi áphthoi* は個物の形相的要素である。(二)ピレボス篇に於ては *to mathēmatiká kai to nous* と呼ばれる *áphthoi* がさうであつた如く、同じ様に此處では *to mélya kai to métron* といふ *áphthoi* が、イデアならびに個物の質料因で

ある。(三)ピレボス篇に於て *huktōn* が *ēs ēu syō-
netai* に分解されてゐるのとまさに同じ意味に於て
此處でも亦すべてのものが前者に於けると同じい
otoxeia に分解されてゐる。(四)ピレボス篇にあつ
ては個物がイデアに對する關係は寫像が原型に對
する關係に同じであつた——個物のイデアへの類
似は前者の *hosos* が後者の *hētrōn* に近接するこ
とに起因する——如く、同様に此處では第三段に
よれば個物のイデアへの *hēthētēs* はほんとうは、
hūmōtis なのであるといつてゐるやうに思はれる。

(五)ピレボス篇では *tō te hētrōn kai tō hosōn* 又
tō mēllōn kai tō hētōn などが、同様にまた此處で
は一〇段によれば *tō ēu kai oi apothōi* 又 *tō hētra
kai tō hētrōn* などが、それ／＼善の根源・惡の根源
なのである。

かくして五つの主要な教義——其の一つと雖も
共和國篇に述べられたイデア説に一致するものは

ない——が、アリストテレスの記してゐる正統的
プラトニズムとピレボス篇に臚るげに描かれた教
説とに共通してゐる。用語は必ずしも同じでない
が、プラトンは文書に於ては學園の専門的用語を
當然避けただらうに反してアリストテレスは又當
然之を保存してゐるであらうからこのことは我々
は異とするに足らない。他の點にあつては兩者の
一致は嚴密である。

まだ二つの項パラグラフの説明が然しながら残つてゐる
第一の項は第七段の *tō de diada touōsou tēn étē-
pau phōsun diā tō toūs apothōis ēēs tōn pōōtōn
eūphōis ēs aītrēs yevhōōthā, oīōtēr ēē tuōs iēkua-
yēōn* なる言葉に始まり第八段を以て終るものであ
る。このうち *toūs apothōis ēēs tōn pōōtōn* なる
言葉は甚だ困難であつて、しかも之が説明されな
いかぎり全體の文章は或程度まで不確實ならざる
を得ないことは直ちに明かである。ポーニツツに

從へば(アレキサンダーによつてゐるのであるが) アリストテレスがこの文章にいつてゐるのはかういふことなのである。——「プラトンが質料因を事實上といはむよりは寧ろ言葉の上で複合體(ポエアリデー)となしてゐる理由は、數・即ち數學的數は素數又は奇數を除外すればすべて二なる數の助けを借りて生成されるといふことにある。」換言すればポーニッツは、プラトンがその *ἀριθμῶν* を命名すべき際に於て、彼は或る數學的數が二なる數によつて生成されるといふ理由によつて *μεγὰ καὶ μικρῶν* といふ複合的な呼稱を選んだのであるとアリストテレスが云つてゐる、と考へてゐるのである。ポーニッツが如何にしてこの問題の文章を第八段と結び付けてゐるかは判然しない。なほまた、此處に「除外」されてゐるところの *ἑστῶτα ἀριθμοὶ* に關しても、諸家の説く所は少しも一致してゐない。ポーニッツはかく大體素數と奇數との間で迷つてを

り、トレンデレンブルク(デ・グライス・エ・スミス)(九)やツエラー(プラトン研究・二五五)やシュヅエーグラは理念的數を指すものと假想してをり、ブランデイス(希臘羅馬哲學史二卷三一二)は之を奇數の理念的數と見做してゐる。かゝる解釋の到底確實といはれないことは、筆者たち自身と雖も容認するところであらうと思はれる。イデア論全體に對する我々の新しい考へ方は、かゝる附隨的な文章に何等かの光を投げ與へるであらうか。

我々はピレボス篇に於て、各 *ἀριθμῶν* はそれが任意の點から反對の兩方向へ延長するといふ意味に於ての複合體であることを見てきた。なほまた第八段、それは明かにいま考究中の文章と結びつけて讀まるべきものであるが、に於てアリストテレスは個物の雜多性を謂つてゐるのであることは明瞭である。それゆゑ、もし此の厄介な *τῶν ἀριθμῶν*

θμωὸς ἔγω τῶν πρῶτων なる言葉の出てゐる箇所が恰度原稿に於て赤字になつてゐたとするならば誰しも左の如くこの一節を敷衍することを躊躇しなかつたであらう。——「プラトンが彼の質料的要素を複合體となした（即ち任意點から反對方向に延びるものとした）理由は、かゝる假説によつてこの要素から個物の雜多が生ずると考へることが容易になるからである。しかしながら手近な類例をとつても雜多性の起原はプラトンの想像する如く質料に求めらるべきでなく、寧ろ形相に求めらるべきものなることが判明する。例之、一片の質料からは一つの机しかできないがその質料に形相を與へる指物師は多くの机を造り得るのである。さうして同じやうにかのプラトン自身を用ひてゐるところの比喻 (*kai* οἱ) *kai* προσεκρίσας ἔπε-
τει τὸ μὲν δεχόμενον ματρί, τὸ δ' ἴδεν πατρί, τῆν
δε μεταξὺ τούτων φύσιν ἐπιόρουσιν タイマイオス篇

五〇D)も有效な反對を呈示し得る。」かくして我々の到達したところの意味は反對の餘地のないのであるから、問題は今や——*τοὺς ἀριθμῶς ἔγω τῶν πρῶτων* が「個物の多」を意味することは可能であるか——といふ點に懸る。この際アリストテレスが我々の援助にやつて來る。物理學二一九B六には *ἀριθμὸς ἐστὶ δυνάεις • kai γὰρ τὸ ἀριθμοῦμε-
 νου καὶ [τὸ] ἀριθμῶν ἀριθμῶν λέγομεν. καὶ ἐ-
 ἀριθμοῦμεν. εὐαρί, 此處からして、ἀριθμοὶ なる言
 葉は一方では οἷς ἀριθμοῦμεν といふ意味に於てピ
 レポス篇の ποσὴν を全く μάλλον καὶ ἴστων から切
 り離して表すために用ひられ、また他方では τὰ
ἀριθμητὰ といふ意味に於てピレポス篇の ποσὴν の
 或る μάλλον καὶ ἴστων に結び付いたものを表は
 すためにも用ひられて、少しも差支へのないこと
 が判明するであらう。この後の方の意味に於てイ
 テアは τὸ μέτρον 又は τὸ εἶν καὶ τὸ μάλλον καὶ*

στῶν 又は τὸ μέγα καὶ τὸ μικρὸν との結合なる
 の意、やはり一つの ἀριθμὸς であり、此處では前
 記の ἀριθμὸς 卽ち ἀριθμητὴν と區別するため τῶν-
 τος と呼ばれてゐるのである。(事實アリストテ
 スの πρώτος ἀριθμὸς はピレポス篇一五Aの εὐς
 である。)従つてアリストテレスが τοὺς ἀριθμὸς
 εἶς τοῦ πρώτου と謂ふのは、 μέγα καὶ μικρὸν と
 εἷς との結合から生ずる ἀριθμητὴν に對する意味に
 於ての μέγα καὶ μικρὸν と ἀριθμοί 卽ち οἱ ἀρι-
 θμητοὶ との結合から生ずる ἀριθμητὴν を指す。
 ἀριθμὸς の二重義に關する此處の説明は、 τὸ εἷς
 καὶ οἱ ἀριθμοί なる句に就ての私の解釋に對して
 致命的と思はれるかも知れないやうな多數の節に
 對しても、あてはまるものなることは言を俟たな
 い。

最後に、アリストテレスが彼の記述して來た體
 系に就て彼自身の觀點から簡短に批判してゐると

ころの第九段に就て一言する。此處で彼は確かに
 イデアの個物に對する地位を εἷς のイデアに對す
 る地位と同じやうに見てゐる。この節の自餘の部
 分全體に於てさうである如く、εἷς がイデアの形相
 因であるのに對してイデアは個物の形相因でなく
 典型タイプなのであるから、此の箇所に或る混淆を存し
 てゐることは、思ふに、否定し得ない所であらう。
 かゝる混淆は、アリストテレス自身 εἶς の機能
 を、一部は内屬的形相因に、一部は外的典型タイプに與へ
 るやうに思はれる如き理論に對する彼の嫌惡を、
 躁急にそして不注意に表現したことに基くものか
 も知れない。またプラトンが、アリストテレスの
 第三段及び五段に於ける叙述から恐らく推論して
 いふだらう如く、*methodos* なる言葉——それは初期
 の體系の術語の一部を形作つてゐた——を個物の
 イデアへの關係とイデアの εἷς への關係との何れ
 を表はすときにも用ひてゐたものとするならば、

かゝる混淆を惹起した若干の責めを自身亦恐らく負ふべきものでもあらう。あるひはまた、プラト

ンは個物の場合は原因即ち *αιτιας* 又は *τίθεναι* を典型即ちイデアから區別したが、イデアを取扱ふ場合は *εἶδος* に此の兩機能を歸屬せしめたといふ事情に由るのかも知れない。何れにしても私はこの章の自余の嚴密な叙述の一般的正確さを疑ふべき理由を見ないのである、ましてそれはプラトンの最も精巧な對話篇の一つの證言によつて確實にされてゐるものなのである。この項を總括するため私は茲に、今論じて來た章の後半の原文を其の譯文とともに附することにする。(以下對譯であるが原文を省略する——譯者)

此の干與干與の教説に於ける唯一の新奇なる點はその名稱に存する。なせならピタゴラス學徒は物は數を模倣することによつて存在するといふのに對し、プラトンはその用語を變じて、

イデアに干與することによつて存在するといつてゐるからである。

四 だがこの干與あるひは模倣が如何なるものたるかはプラトンもピタゴラス學徒もともに之を人々の問題として殘した所である。なほプラトンは感性的者とイデアとから區別された、兩者の中間に位するところの數學的者の存在を主張する。それは、それが〔即ち數學的者が〕永遠・不動なる點に於て感性的者とは異り、また各數學的者には多くの類例例があるがイデアは各々唯一であるといふ點に於てイデアとも異なる。さて五イデアはすべての他のものゝ原因なのであるから、プラトンはイデアの要素はすべての存在の要素だと考へた。かくして彼の體系にあつては、大小が質料因であり一と數とが形相因である。大小からしてイデアは、一への干與によつて生ずる。この際、一を存在となし、何等か他の存在

六 するものゝ單なる賓辭となさない點、彼はピタ

ゴラス學徒に酷似する。しかしながら、單元ユニティと考へられた無限定者に替へるに複合體コンプレクティヴを以てしそしてこの複合體を大と小に分つことはプラトンの特徴である。なほまた彼は數を感性的者から區別されたものとするが彼等は數が事物そのものだと主張する、そして「彼はさうするのであるが」彼等は數學的者にそのより高い存在とより低い存在との間の中間の地位を與へてゐない。ピタゴラス學徒の敎説に對抗して一と數とを事物から分離すること「彼等は之をなさなかつたのである」そしてイデアを導入してゐることはプラトンの論理的考究に起源するものである、なせなら彼以前の人々はデアアレクテイクを修めなかつたのであるから。彼が他の一方の「即ち質料的」要素を複合體となした理由は、〔この假説に立つとき〕素數以外の數〔即ち個物〕

八 是例へば蠟から生ずる如くこれからして生ずるは例へば蠟から生ずる如くこれからして生ずる

八 ことなるからである。だが事實は彼に味方しない——かゝる理論は支持さるべくもない。何故なら彼の學派は形相は一度きり生産をなさないものと考へて多を質料から導いてゐるけれども、我々の見る所によれば、一片の質料からは唯一つの机が作り出されるのに反して形相を與へる一人の人は多くの机を作り得るのである。

兩性にあつても同様である。女性は一度の交接によつて受胎し了るが男性は幾度でも授胎し得るのである。かゝる大工の木片への關係・男性の女性への關係は形相の質料に對する關係と同じである。「故にプラトンが質料を多の根源とすることの正しくないことは明かであらう」。かくプラトンは問題の點を決定した。以上の所言から明かなる如く、プラトンは二つの原因・即ち

形相因と質料因をしか用ゐてゐない。イデアはすべての存在の形相因であり一はイデアの形相因なのである。感性的者の場合にはイデアが、そしてイデアの場合には一がそれに歸屬せしめられるところの基體即ち質料が、何であるかもまた明かである。それは一つの複合體・即ち大小なのである。更にまた彼はこの二要素にそれ／＼善の根源と惡の根源とを歸した、あだかも既に我々の考察したところの彼以前の哲學者の或者、例之エムペドクレスやアナクサゴラスの如くに。

五、結 論

いまや我々はプラトンの敎説發展に關する一つの暫定的理論を組成することができるであらう。

一、ヘラクレイトス學徒クラテュロスから學んだ哲學的懷疑論から出發し、プラトンは一時彼の師ソクラテスの如く彼の知的精力のはげ場を倫理

學的領域に於ける一般的概念の構成に於て見出だしてゐたやうである。かゝる一般的概念が嚴密な意味の知識でないことはプラトンも充分氣附いてゐた所であつた。だがこの時代にあつては彼はソクラテスの如く眞に知識といひ得るものゝ到達し得ないものなることを信じてゐたゆゑ、このことは何等彼の煩ひとはならなかつた。

二、眞の意味の知識への欲求に壓倒された彼は之をソクラテスの一般概念から抽出すべき方法を索ねた。これがためには(一)各一般概念は單に個物の多に共通なるものを表すのみでなく、また個物から乖離した永遠・不動の存在を不完全な様式に於て表してゐるのであると想定すること、そして(二)この永遠・不動の存在の不完全な表現を完全な表現に變ずる方法を案出すること、が必要である。共和國篇やバイドン篇に見る如きイデア論は、かゝる想定が次の如き命題へ敎義的に開展されたも

のに外ならない。——(a)すべて同じ名稱で呼ばれる個物の多の存するところには、それらとは離れてイデアなる永遠・不動の存在がある。(b)各個物がそのものであるのは、そのうちに同名のイデアが臨在するのによる。共和國篇やバイドン篇にあつてはプラトンはまた、かゝる一般概念の與へる如きイデアの不完全な表現を、眞の意味の知識を構成すべき其の完全な表現に變じなければならぬとして其の企畫を陳べてをり、そしてまた坦懐にかゝる企畫には未だ満たし得ない空隙の存してゐることを告白してゐる。故にこの段階に於てプラトンは、イデアによつて眞の意味の知識に到達しようとする試み、しかもその試みの不成功なることを如何なる彼の批評家にも劣らず判然と認めてゐるのである。實際、より高き論理の基礎たるべかりしイデア論は、それ自身重大な種々の反對を如何ともし得ない立場にある。——(a)同名の個

物の多を見出だす場合常にイデアを要請すべきであるならば、通常 τῶντος ἰδιόπατος と呼ばれる反對論が生じ得る。また(β)如何にしてイデアが、その單一性と乖離的存在性を犠牲にすることなしに個物に分布され得るかを理解することは不可能である。

三、かゝるイデア論の反對に應せむがため、プラトンはビレボス篇(及びその他)に於て其の致説を補足する。彼は依然個物から分離した永遠・不動の存在を要請することは止めないが、(a)個物の多が同じ名稱で呼ばれる場合常に之に應すべきイデアが存在するといふ主張や、(b)個物がそのものであるのはそれに於ける同名のイデアの臨在によるのであるといふ主張は、之を撤回してゐる。彼は今や、各イデアを、ある割切な量(μέγεθος)と與へられた質料(ἕκαστα καὶ ἰδιόπατος)との結合によつて生ずる永遠・不動な・自然に於ける典型と見做し、それに

つながらる個物は、割切量とは多少異なる量 (*apothekos*) とその質料との結合から生じたところの、典型から偏れるものであると考へた。従つてイデアは今や *paradeisyia* であり、個物はその *epithos* がイデアの *epi* に近似するゆゑを以てイデアの *quasiata* なのである。かくの如くにしてプラトンは知識の對象たる *epi* *parà* *tà* *aiodurtá* の永遠・不動な存在を取得する。ピレポス篇では彼はその認識が如何にして得られるかの説明を少しも試みてゐない。だが私は今後、共和國篇やバイドン篇の時代はに存在論を通じて科學サイエンスに至らむとし、バルメニデス篇やピレポス篇の時代には科學を通じて存在論に至らむとしたものであることを、示さうと思ふ。ピレポス篇に含まれたイデア論の記述は、後來變改又は補足されたかもしれないが、「形而上學」第一章第六節に於けるアリストテレスの要約にそれが嚴密に一致することは、それがづつと最後まで

大體プラトンの存在論の正しい記録であつたことを語つてゐるものゝ如く思はれるのである。

いま明かにされた理論を批判し、又はイデア論がかゝるものならばかゝる發見の歸結は如何であるかを辿ることを、試みる時期にはまだ達してゐない。だがかゝる考究の初期にあつても、後期イデア説が私の想つた如きものであるとすれば既に個物には形相と質料とが *epithos* *to* *hēnēa kai* *hēi* *keōn* との形に於て與へられてゐるのであるから、*hēlēsis* 又は *hēlēsis* なる關聯的發説を伴ふところの ハイデイクイメツク 典型的イデアはアリストテレスの觀點よりして單なる贅物に過ぎないといふ限りに於て、アリストテレスのプラトン攻撃は新生面を見出だすものなることは觀取するに難くない。また、もし私の考へる如く後期の理論がプラトンの著作の或るものに於て表明されてゐるとするならば、彼の著作の前後を決定する重要な規準を獲られるだらう。

ことも容易に觀取し得る。なほまた、此の新しい觀點からなされた後期對話篇の研究はプラトンと同時代のピタゴラス學徒の教へならびに彼のアカデミーに於ける・そして新プラトン學派に屬する・後繼者たちの教への上に新しい光を投ずることに或ひはなるかも知れない。かゝる題目に就ても今後論じて見たいと思ふが、私の最初の仕事は先づその本源的典據に就ての考究を完成することでない。

以上、私は二つの節、即ちピレポス篇の一節と「形而學々」の一節とを解釋し應用することに努めた。前者に關する私の解釋の特殊な新異の點は、*ἡμετέρου καὶ τοσούτου* とを區別しイデアを *ἑστῶτον* に歸したことに存する。後者の解釋に於ける新異の點は *τοῦ ἐν καὶ οὐ ἀποθνήσκει* がすべてのものゝ形相的要素、即ち *εἶδος* はイデアの形相的要素・そして *ἡ ἀθάνατος* は個物の形相的要素、なることを認めたことに存する。その考究の途上四つの重要な命題が分

れ出た。——(一)內的な證言はピレポス篇が共和國篇やバイドン篇に後れて書かれたことを證明する(二)ピレポス篇には新しい改革されたイデア説の痕跡が見える(三)「形而上學」第一章第六節は正統的プラトニズムの首尾一貫せる記述を含んでゐる。(四)「形而上學」第一章第六節に於てプラトンに歸せられてゐる教説は嚴密にピレポス篇の教説に相當する。

私は終始かのプラトンの研究される如何なるところにあつてもその名前の尊敬されるところの二大學者に反對して來たわけであるから、この文の最終の言葉はエドゥアルト・ツェラー及びヘルマンボーニツツに對する私の畏敬と感謝との表白であることが相應しく思はれる。もし大膽にも私が彼等の到達した結果に何物かを加へたと考へ得るならば、それに至らしめたものは即ち彼等の著作に外ならないのであるから。ともあれ我々は、爭論ではなく對話するのである。 *οὐκ ἐπιτέλειται, ἀλλὰ διακρίνεται.*